博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　井上　史雄

張建華氏の論文、「日中両語における取り立て表現の研究――『だけ』『ばかり』『しか』と<只><浄>を中心に」は、修士論文の「日本語のとりたて詞（ママ）と中国語の範囲副詞における日中対照研究――『だけ・ばかり・しか』と『只・光・浄』を中心とする」を、はるかに多くの用例の収集と、広い範囲の参考文献への目配りを元に、やや異なる研究姿勢をもって発展させたものである。

論文は、先行研究、日本語（だけ・ばかり・しか）の検討、中国語（只・浄）の検討、日中対照の四部分より構成され、さらに日本語の部分は、<統語的特徴>と<意味の記述>に分けられている。また、<論文の目的>によれば、中国人に日本語を教えるために役立つという視点も考慮に入っている。

<論文の目的>にある、従来の研究では取り立て助詞の意味を明らかにするには不十分なので、新しいアプローチが必要だとあるが、どのような<新しいアプローチ>がなされたのかは、あまり明らかではない。また、寺村氏の「影」という概念にも、やや不明瞭な点が見られた。

先行研究では、修士論文が、ほとんど沼田善子氏の論に終始していたのに対し、本論文では大槻文彦までさかのぼっている。ただし、本論中で扱っているせいかもしれないが、沼田論文は扱われていない。その点の質問に対しては、沼田論文では限界があるため扱わなかったということであった。

日本語の部分の<意味的特徴>は、修士論文とほとんど同一であるが、<意味の記述>の部分は面目を一新している。それぞれについて、「全体と部分」「アクチュアルとポテンシャル」「期待が満たされなかった場合」というように、きわめて細かく分類し、それぞれに豊富な用例を付している。非常な努力がなされたことは明らかである。たが、取り立て助詞そのものというより、多分に文脈の問題でもあるため、分類の別が必ずしも明確ではなく、いささか分類のための分類という印象があるのは否めない。この分類はもう少しすっきりしたものでよいのではないかと思われる。また『しか』については、「名詞＋ばかり」のような形態的分類をしていないのは若干問題である。さらに、三つの助詞を独立して論じたため、相互の共通性、異質性などについては、やや曖昧な結果になっている。ネイティブの協力が必要になろうが、もう少し置き換えが可能かどうかなどを検討し、それぞれを比較していくことが望まれる。総じて、せっかく収集した膨大な用例が生かされていないという惜しまれる印象である。

中国語の部分は、今までになかった新しい分析を試み、着実に成果を示している。ここに同一作品のいくつかの翻訳を比較する試みや、直訳体・意訳体の両面からの分析が加えられることが望まれるが、ここまででもある水準に達したものといえよう。

結論的部分の日中比較対照は、日本語の整理に曖昧さや混乱が残ることと、五つの語を独立に論じたため、やや説得力に欠けるのは残念である。もしう少し日本語の部分を比較して論じ、不十分ながらも修士論文では試みていた全体の一覧表をより工夫したものにするというようなことによって、本論文は、立派に論文としての自立性を獲得するであろうと思われる。もう一歩の前進を心から期待する。